

一般選抜試験 (B日程) 問題

現代の国語 (六〇分)

(服飾文化専攻、健康栄養学専攻)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

神の権威が弱くなるなか、一八世紀後半の啓蒙思想やフランス革命以降の西欧社会において、学問の真理は神が保証するものではなく、自然そのものの現れにおいて確かめられる必要が出てきた。自然の理念を描くのではなく、自然そのものを客観的に描こうとするのだ。こうして客観性こそが真理であるという通念が生まれることになる。一九世紀半ばになると、「客観的な」図像をどのように作成するのかが、大きな課題になってくる。

機械による客観的な測定はこの文脈¹のなかで生まれたものである。社会学者の松村一志は測定をおおむね時代順に並べて六段階に分けて整理している。

- ① 感覚の段階……身体感覚によって確認する
 - ② 視覚化の段階……物質変化を目視する
 - ③ 数量化の段階……物質変化に目盛りを与える
 - ④ 誤差理論の段階……〔複数回測定して〕測定精度を誤差理論によって分析する
 - ⑤ 指示・記録計器の段階……物質変化が目盛り上の指針の動きに変換され、記録される
 - ⑥ デジタル化の段階……数量をデジタル表示する
- ①から③は、判定者が重要になるから、証言によって結果を保証す

る必要がある。しかし④以降は機械が自動的に計測することになり、測定結果は研究者の手を離れて自立していく。つまり「より客観的」になる。

ただし、機械があつたから客観性が追求されたわけではなく、むしろ客観性の追求への意志が先にあつたようだ。たとえば一九世紀に発展しつつあつた写真という新技術は、偽造・修復可能だ²。写真技術ゆえに客観性が重視されるようになったわけではなく、機械的な客観性を目指す要請のほうが先に立ち、写真はその要請のために重宝されたのだ。

客観性とは、人の目というあいまいなものに「邪魔¹されずに見る」ことを指すようになる。こうして機械的客観性が成立する。写真という機械を手にしたことよって「人間による判断から解放された表象を手にすることができると信じられたのである。自然は神からも人間からも切り離された、それ自体で成り立つリアリティとなる。自然を人間から切り離して正確に認識しようとする意志が、aへの排除とbへの執念を生んだのだ。

一九世紀末から客観性はさらなる段階へと進む。測定や記録された図像の正確さに依拠²した機械的客観性は、法則、記号をもちいた論理構造に主役の座を譲る。

たとえば、ゴットロープ・フレーゲ(一八四八―一九二五)に始まる一九世紀末からの現代数学の進展も、人間の操作とは無関係に成立している論理的な関係のなかに数学の基礎を求めようになつていった。あるいは物理学においてはマックスウェル方程式のような構造が

科学的な実在とみなされるようになった。測定ではなく方程式や論理式が客観性となる、ということだ。言い換えると、「それは何か？」ではなく「事象と事象がどういう関係でつながっているのか？」にシヨウテンが移るということである。

一九世紀末から二〇世紀初頭にカツヤクした物理学者のアンリ・ポアンカレ（一八五四—一九一二）は次のように語っている。

「科学の客観的価値とは何か」と問うとき、その意味は「科学はものごとの本当の性質を教えてくれるか」ということではない。「科学はものごとの本当の関連を教えてくれるか」ということを意味する。

個々の対象ではなく対象間の法則こそが客観性だとみなされるようになるのだ。法則性が重視されることで、人間の関与は一層抹消される。さらには法則の方程式にはどんな数値が代入されてもよいわけだから、個別の対象も抹消される。数式と数値だけが残るのだ。

法則性の追求によって、あらゆる学問の成果は研究者の意識を離れて、客観的に保証されるようになる。凶像も機械による測定も離れて、論理的な整合性こそが、自然の科学的真理を言い当てると考えられるようになるからだ。

論理的な構造が支配する完全な客観性の世界が自然科学において実現したとき、自然は実はそのままの姿で現れることをやめ、数値と式へと置き換えられてしまう。自然を探究したはずの自然科学は、自然が持つリアルな質感を手放すようになるだろう。雨や風の音や匂い、草木が繁茂していく生命力は消えていく（もちろん事象のリアリテイにこだわりつづける生物学者・生態学者もいるだろうが）。客観性の探究において、自然そのものは科学者の手からすり抜け、数字化された自然が科学者の手に残ったのだ。

出典 村上靖彦 『客観性の落とし穴』より

※ 原典では本文中に筆者による主に出典を示す注記の「*番号」が多数ありましたが、読解しやすくするために省略しました。

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 この文脈の指す具体的内容を五十字以内で答えなさい。

問三 写真技術ゆえに客観性が重視されるようになったわけではなく、2とあるが、2としてそのように言えるのか、その理由を三十字以内で答えなさい。

問四 a b に入る最も適当な言葉を、次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

- ア 客観性 イ 柔軟性 ウ 寛容性
- エ 正当性 オ 主観性

問五 3 事象と事象がどういう関係でつながっているのか？とあるが、これ以降の文章から同じ意味のことを述べた部分を二十一字で抜き出して答えなさい。

問六 4 客観性の探究において、自然そのものは科学者の手からすり抜け、数字化された自然が科学者の手に残ったのだとあるが、これはどういうことか。それを説明した次の文の空欄aには六字、空欄bには五字で本文中から言葉を抜き出し、文を完成させなさい。
(説明文)

客観性の探究において、a を持った自然は捉えられず、b だけの自然が実現されていく。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「世界の最新ニュースがリアルタイムであなたのデスクトップに」という広告を見た。もう時代はそんなところまで来たのか、と感心すると同時に、世界中の情報がリアルタイムで流れ込んできたら、私の神経はあつという間に限界を超えて発狂状態に陥るのでは、と考えてしまった。

現代のデジタルネットワーク社会は、光速の伝達速度をめざして、〈同時性〉を世界全体に押し広げようとしている。情報が、即時的に遅延なく伝達され処理されることこそ、電脳社会の見えざる目標なのかもしれない。私たちの〈心性〉も知らず知らずのうちに、¹速度礼賛者に変容していく。

時間にかかる手紙に代わって、瞬時に反応する電子メールを使うこと。書店に足を運ぶ代わりに、インターネット上の電子書店で、検索と注文を瞬時に完了させてしまうこと。分厚い研究書や古典をじっくり読む代わりに、電子テキストでキーワード検索しながら、必要なカシヨを瞬時に表示させること。思いついたとたんに、相手の携帯に気軽に接続して話してしまうこと。つまり総じて、私たちは欲したときに、瞬時に世界とコンタクトをとり、行動していることになる。

繰り返しになるが、情報と言っても、速度が情報の価値に大きく関わるものと、そうではないものの二種類があることを忘れてはならない。

例えば、台風やそれに伴う交通の混乱の情報は、*タイムラグがなければいほど価値が高く、速度はこの種の情報にとっては本質的である。そして昨日出された台風情報は今日の我々には何の価値も持たない。これに対して、文学や思想の古典的資料などは、伝達速度や時間的経過で価値が²キョクタンに変化することはない。

この両者はもちろん、従来、情報と知識という形で明確に区別され

てきたものである。しかし、あらゆるものが情報化され、ネットワーク上に蓄積・開示されてしまう今日にあっては、すべては〈情報〉として処理され、この区別は忘却のあなたに追いやられてしまったようだ。

私の個人的体験にすぎないかもしれないが、自分との対話をじっくりと重ねながら学び味わったものは、いわば〈体得〉²されたものとして、私に染み付いているが、早分かり方式で仕入れた情報は、私になん³の痕跡も残さず、あつという間に消え去ってしまう。

三日で覚えた情報は、三日で消え去ってしまうのである。情報の速度こそが絶対の価値となっている現代においては、〈私〉は成熟していく存在であるよりは、瞬間的な反応マシン、つまり、情報が入り込んでは流れ出ていく一結節点にすぎない存在になっていくように感じられる。

*ハイデガーは時間の本質を〈時熟〉、つまり、今の継起としてではなく、時間性の成熟と捉えた(『存在と時間』)³。逡巡すること、反省すること、あるいは、熟考、熟練などは、情報のインプットに対して、きわめて膨大で無駄に思われるタイムラグのちに初めてアウトプットが生じるたぐいの営みである。これらは瞬間的で切れ切れの今の積み重ねではなく、むしろ時間の成熟によるものだ。

時間がかかる、時間の遅延があることを、すべて〈タイムラグ〉として否定的に捉えたり、スピーデーであることが、私たちの〈豊かさ〉を保障すると考えるならば、それは根本的な錯誤であるように思われる。無駄な時間を省いて、残った時間で豊かな生活を、と喧伝⁴されながら、その残った時間もすべて、無駄な時間を省くという心性に汚染され、時熟を味わえないからだ。結局、私たちの生活は、テンポ全体が単にあわただしく加速しているだけなのである。

〈私〉が、便利さや速度の幻惑には徹底的に弱い存在であること、しかし、それにも関わらず、それに身を⁵ユダねることは、〈私〉⁴を徹

底的にやせ細った刹那的存在にしてしまうこと。このことへの自覚は、今日においては決定的に重要であろう。

現代の情報、消費、社会システム全体が、便利さと速さを〈豊かさ〉と称して邁進せざるを得ない以上、〈私〉は常に情報反応マシン、消費マシンに変形されつつある存在である。だとすれば、時熟や成熟の契機は、外から与えられることを求めるのではなく、〈私〉自身の内側に自覚的に求めていくほかはないのかもしれない。

出典 黒崎政男 『デジタルを哲学する』

時代のテンポに翻弄される〈私〉 より

*タイムラグ……ある目的をもって操作をしたとき、その操作を行ってから反応が起きるまでにかかる時間のこと。

*ハイデガー……一八八九年～一九七六年 ドイツの哲学者。

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 ¹速度礼賛者が礼賛することがらを三十字以内で具体的に答えなさい。

問三 ²〈体得〉されたものとあるが、体得するために必要なこととはなにか、漢字二字で答えなさい。

問四 ³逡巡するの意味として適当なものを、次のア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア つらい努力を続ける
- イ もう一度初心に戻る
- ウ 無心で答えを待つ
- エ 決心がつかずためらう
- オ 一つの考えにこだわる

問五 ⁴徹底的にやせ細った刹那的存在とはどういうことか。それを説明した次の文の [] に入る表現を本文中から十五文字で抜き出し、文を完成させなさい。

(説明文)

[] だけの、瞬間的で切れ切れない情報処理で日々を送るような〈私〉だということ。

問六 「現代のデジタルネットワーク社会」を生きる上で、われわれが留意すべきことは何か。問題文の趣旨をふまえた上で、あなたの考えを百二十字～百六十字以内で述べなさい。

現代の国語

（服飾文化専攻、健康栄養学専攻）

			問一			問二			問三		問四		問五		問六	
			①	じやま		学	然	う	と	写	a	科	か	a	リアル	
			②	いきよ		問	そ	文	は	真	オ	学			アル	
			③	焦点		の	の	脈	言	は	b	は			ル	
			④	活躍		真	も	。	え	偽	ア	もの			な	
			⑤	まっしやう		理	の		な	造		の			質	
						は	を		い	・		ご			感	
						自然	ど		か	修		と			b	
						の	の		ら	復		の			数	
						理念	よ		。	が		本			式	
						念を	う			可		当			と	
						を描く	に			能		の			数	
						くの	客			で		関			値	
						ので	観			、		連				
						はなく	的			必		を				
						なく自	に			ず		教				
							描			し		え				
							く			も		て				
							か			客		く				
							と			観		れ				
							い			的		る				

一問

問一

①
箇所
②
極端
③
こんせき
④
けんでん
⑤
委(ねる)

問二

情	る
報	こ
が	と
が	。
入	
り	即
込	時
んで	的
は	に
流	遅
れ	延
出	な
て	く
い	伝
く	達
	さ
	れ
	処
	理
	さ
	れ

問三

時
熟

問四

エ

問五

情
報
が
入
り
込
んで
は
流
れ
出
て
い
く

問六

情	入	も	る	く	い	確	で
報	れ	残	だ	、	は	立	あ
化	替	ら	け	一	、	す	る
社	わ	な	で	つ	繰	る	と
会	っ	い	あ	の	り	。	考
で	て	。	る	知	返	立	え
は	い	私	。	識	し	ち	る
、	く	の	外	や	考	止	。
情	。	心	の	事	え	ま	
報	そ	は	情	象	る	り	
、	の	情	報	を	こ	、	
知	た	報	に	、	と	思	
識	め	の	流	時	が	考	
が	、	流	さ	を	私	す	
次	私	れ	か	と	と	る	
か	の	に	る	け	い	こ	
ら	漂	だ	て	う	と		
次	に	っ	、	主	が		
へ	は	て	あ	体	大		
と	何	い	な	を	事		